

## 小室圭さん説明責任包囲網と、秋篠宮さまの「駆け落ちのすすめ」

### 秋篠宮さま「結婚と婚約は違いますから」発言を読み解く

矢部万紀子 コラムニスト

とうとう宮内庁長官が、記者会見の席で小室圭さんに「説明責任」を説いた。12月10日、西村泰彦長官は「ご結婚に向けて、(略)説明責任を果たすべき方が果たしていくことが極めて重要と考えています」と言い、果たすべきは小室さんと代理人弁護士だとした。

説明してほしいなら、もっと早く、水面下で交渉すればよかったのではないか。それがうまくいかず、業を煮やしてのことだったか。いずれにせよ小室さんは遠からず、文書を出すのだろう。どんな文書になるかはさておき、「長官にまで叱られた人」になってしまった。よいのだろうか。



小室圭さんに「説明」を求めた宮内庁の西村泰彦長官

事態を急速に動かしたのは、秋篠宮さまが55歳の誕生日に先立って開いた記者会見だ。延期されている眞子さまの結婚について、「結婚することを認めるということです」と述べたうえで、会見の最後に「結婚と婚約は違いますから」と述べた。最後の一言が余韻というか、解釈の余地というか、そういうものを与えた。

### 秋篠宮さまは悲痛な思いで「駆け落ち」をすすめている



55歳の誕生日を前に記者会見する秋篠宮さま=2020年11月20日、東京・元赤坂の赤坂東邸、代表撮影

秋篠宮さまのお言葉を単純に解釈すれば「結婚はしてよい、でも『納采の儀』はしない」となる。元宮内庁職員で皇室ジャーナリストの山下晋司さんは、「納采の儀を経ずに婚姻届を出し結婚されることは、前代未聞ですが、起こりうる話です」と「AERA」(12月14日号)で語っていた。

だが、秋篠宮さまが言いたかったのは、そういう手順の話ではないような気がした。あれこれ考え、行き着いたのが「駆け落ちのすすめ」という言葉。秋篠宮さまは眞子さまに駆け落ちを、悲痛な思いですすめている。そう理解した。

もちろん、「二人で逃げて姿を隠す」駆け落ちとは違う。一気に結婚するしかない。そう秋篠宮さまは思っている、と感じたのだ。一気にとは、どういう進め方かはわからない。とにかく「一気に」しか道はない。そんな緊迫感に「駆け落ち」という言葉が浮かんだのだ。少なくとも秋篠宮さまの悲痛さは、西村長官にも届いた。だから動いたのだろう。それが、秋篠宮さまの望みだったのかどうかはわからない。

お誕生日の17日前、結婚を強く希望する眞子さまの「お気持ち」文書が公表された。その際、皇嗣職大夫が「両殿下がお二人の気持ちを尊重された」と記者に説明したが、具体的にはどういうことか。そういう質問に対し、秋篠宮さまは「それは結婚することを認めるということです」と述べた。理由は「憲法にも結婚は両性の合意のみに基づいてというのがあります。本人たちが本当にそういう気持ちであれば、親としてはそれを尊重すべきものだというふうに考えています」だった。

2年前の会見で秋篠宮さまは、「多くの方が納得し、喜んでくれる状況にならなければ、婚約にあたる納采の儀を行うことはできません」と述べている。当然、記者からはそのような状況になっているか、と質問が出た。そのような状況ではないと思う、娘も同じ気持ちだろうとの答えで、いったんこの質問は終わった。

単純なゴーサインではないにしても、認めたならこれからどうなるのと誰もが思うわけで、最後に関連質問をした記者も同じだったろう。「延期とその原因についてご本人たちがご説明されることが必要」ではないか、「殿下はどのようにお考えでしょうか」と尋ねた。西村長官と同じ「説明なくして結婚なし」の立場だ。

秋篠宮さまは、「実際に結婚するという段階になったら、今までの経緯とかそういうことも含めてきちんと話すということは、大事なことだと思っています」と述べた。このあとに「お父様のお立場として」の考えを尋ねられ、「結婚と婚約は違いますから」となった。続けて、こう述べた。

「結婚については、本当にしっかりした確固たる意志があれば、それを尊重すべきだと私は思います。これはやはり両性の合意のみに基づくということがある以上、そうでないというふうには私はやはりできないです」

## 葛藤の末に、よすがとした「婚姻の自由」

秋篠宮さまのお誕生日会見で、撮影が許されているのは 3 問目までだそう。1 問目(「立皇嗣の礼」を終えての感想)、2 問目(コロナ拡大と皇室の役割)があり、3 問目が眞子さまの結婚についてだった。映像を見ると、3 問目で秋篠宮さまがはっきり変わった。すごくつらそうになった。

答える前に、少し宙を見た。そして、「えー」という言葉が増えた。「えー、娘の、えー、結婚について、えー、つい先日、1 週間ほどに前になりますけれども、えー、長女が、今の自分たちの気持ちというものを文書で、えー、公表いたしました」。

回答をそのまま文字にすると、こうなる。以後も「えー」が繰り返される。中には 5 秒を超えるときもあった。ゆっくり考えながら進める。そのための間をとる言葉だったろう。が、「嘆息」という日本語が頭に浮かんだ。「なげいてためいきをつくこと。甚だしくなげくこと」。広辞苑にはそうあった。



2017 年 8 月、ハンガリー旅行から帰国され、羽田空港に到着した秋篠宮さまと眞子さま=代表撮影

秋篠宮さまは皇室の中にあつて、人一倍「国民と共にある」ことを意識し、税金コンシャスな方だと思っている。その表れの一つが、2 年前に明確にした「納采の儀」の条件だろう。眞子さまが「お気持ち」で「様々な理由からこの結婚について否定的に考えている方がいらっしゃることも承知しております」としたのも、それがあつてのことだ。それでも眞子さまは、「結婚は、自分たちの心を大切に守りながら生きていくために必要な選択です」と言い切った。深い愛。

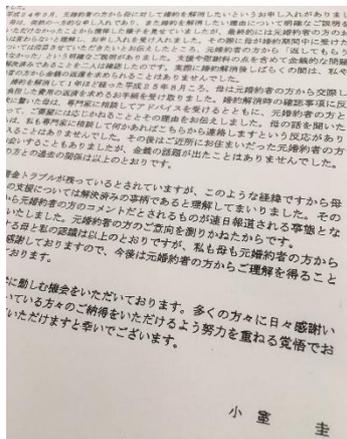
秋篠宮さまはだからといって、「そこまで好きというのですから、認めるでしょう、もう」などと言えるわけがない。では「好きでもだめです。国民の反対がありますから」と言い切れるのか。娘の思

いと皇嗣としての立場。葛藤の末に、よすがとしたのが「婚姻の自由」を定めた憲法だった。その葛藤が秋篠宮さまからにじんでいた。

自民党の伊吹文明元衆院議長は、それを「相克のようなつらいお立場」と表現した。会見公表の3日後、派閥の会合でのことで、同時に「(週刊誌報道について)小室圭さんは国民にしっかり説明を」とも言っていた。西村長官よりクイックなのは、宮内庁に主計課長として出向した経歴からだろうか。大蔵官僚だった伊吹氏が出向したのは1977年。それ以来の思い入れあつてのことだと思う。

## 小室さん母子が一步も譲らないなかで

そのようなわけで、一気に小室さんは「説明責任」に包囲されることになった。問われているのは、「母の400万円借金問題」。17年12月、「納采の儀」の日程が発表された翌月だったが、母と婚約していたという男性が週刊誌に告白したのが始まりだ。この男性は20年11月30日、秋篠宮さまのお誕生日(つまり会見が報道される日)に発売された「週刊現代」で、「もう返さないでいい」と語った。絶妙すぎるタイミング。これで、小室さんへのバッシングと包囲網はさらに強まった。



2019年1月22日、週刊誌などで報じられた「金銭トラブル」について小室圭さんが公表した文書

で、ここからは想像だが、「説明」は難しいと秋篠宮さまは思っていたのではないだろうか。19年1月に小室さんは、文書を発表している。それでも、バッシングはやまなかった。であれば当然、その後も誰かが小室さん(と眞子さま)に「借金を返してはいかがでしょうか」とか「もっと説明してはどうですか」とか、言っていたら。秋篠宮さまが言うわけにいかないなら、宮内庁とか関係者とか。誰も言っていないなら、そちらの方が不思議だ。だから西村長官の発言は「今さら？」だし、ちょっと無責任な気もした。

それはとにかく、ことここに至るまで、小室さんから追加の説明はされなかった。つまり、文書を出したときと同じ状況で、追加説明の必要はない、と小室さんは思っている。そう解釈するのが自然なのだと思う。文書には、「借金ではなく支援」「解決済みの事柄」とあった。バッシングされても、

そこから一步も譲らない。母の意志と、それを守るという小室さんの意志。母一人子一人の小室家が、垣間見える文書だった。

それから間もなく2年。小室さん&小室家のスタンスは全く変わっていないことを、秋篠宮さまは十分に承知していたのではないだろうか。それでも結婚を強く望む娘。秋篠宮さまは、苦悩した。「憲法」を根拠に結婚を認めても、事態は進まない。それもわかっていた。だから、会見の最後、「結婚と婚約は違いますから」という言葉が囁かずも出てしまった。そんな気がする。

秋篠宮さまの言葉を解きほぐしてみる。結婚は、憲法で保証されているから自由にできる。婚約=納采の儀は皇室のしきたりで、国民に明らかにした条件をクリアすることは必須。でも、相手の考えが変わらないなら、事態は変わらない。それなら「婚約」は飛び越えて、一気に「結婚」という自由の領域にいくしかない。そんな「駆け落ちのすすめ」と理解した。

## 「ここ」ではない、「どこか」へ



秋篠宮ご一家=2020年11月14日、秋篠宮御仮寓所、宮内庁提供

では、ここから先どうなるのかと聞かれたら、正直、わからない。小室さんが文書を出さないわけには、もういかないはずだ。だが、「借金ではない」「解決済み」の旗を下ろせるのだろうか。仮にそれを下ろして、「全面謝罪」のような文書になったとして、それは小室さんと眞子さまにとって幸せなのか。若い二人を、親の借金についての謝罪と引き換えに結婚させる。そんなことを秋篠宮さまは望んでいるのか。そもそも、今の日本でまかり通ることなのか。さまざま思うが、現実がどう動くかはわからない。

小室さんバッシングの主因は、皇室経済法に定められた「一時金」だろう。朝日新聞が1億5250万円以内になると計算していた。これがもらえる小室さん(と母、ということになっている)を「濡れ手で粟」とバッシングして、溜飲を下げる。誰かが勝てば、誰かが負ける時代を象徴していると思う。コロナ禍で生活に困っている人はさらに増えている、バッシングが収まらない構図は理解できる。同時に、小室さんと眞子さまに何か落ち度があるのだろうかと思う。

**眞子さまのことを思うとき、女性皇族という存在を考えずにはいられない。「男系男子」が皇位を継承する皇室にあって、女性はすべて「男性でない」存在だ。**皇室典範には、「天皇及び皇族以外の者と結婚したときは、皇族の身分を離れる」と決められている。

いずれ離れる存在なのに、いる間は皇族らしさを求められる。昨今は、皇族の人数が減っているから、公務の担い手として期待される。「立皇嗣の礼」が終わってすぐに「皇女」というものを政府が検討していると報道された。結婚後も特別公務員のような立場で公務を担うものだそうで、女性皇族を敬う気持ちがあるのかないのか、よくわからない制度だと思う。

**眞子さまはきっと、「ここではない、どこか」に行きたいのだ。**国際基督教大学(ICU)に進学し、留学説明会で出会った同級生。彼と、「ここではない、どこか」に行こうと思ったし、今も強くそう願っている。「ここ」でないところで、新しいことをする、違う自分になる。人を動かす強い動機だ。その思いのエンジンになるのは、「ここ」への不満。誰にでもある、ごく当たり前のことだ。

眞子さまにとっての「ここ」は、男子が一番、女子は二番、とはっきり序列がついた世界だ。女子はそういう存在だと、生まれた時からわかっている。結婚したら出ていけと言われながら、結婚しても働いてと求められる。「ここでない、どこか」へ行きたい気持ちが強くなっても、なんら不思議でない。

佳子さまは19年3月の会見で、眞子さまの結婚について「姉の一個人としての希望がかなう形になってほしいと思います」と明言した。佳子さまには、眞子さまの「ここでない、どこか」へ行きたい気持ちがよくわかっている。理解だけでなく、共有。その可能性は低くないと思う。

そして天皇陛下の長女である愛子さまも、男系男子の世界では「男子でない」女子の一人にすぎない。愛子さまは2021年12月1日、20歳になる。そのとき、愛子さまは「ここ」をどう思っているだろう。眞子さまの結婚はどうなっているだろう。